

五山僧は山谷詩をいかに読んだか —万里集九『帳中香』について—

緑川英樹

京都大学

北宋の詩人黄庭堅（1045-1105、字は魯直、号は山谷道人）は江西詩派の祖として中国古典詩史上に重要な地位を占めるが、日本の室町時代においてもその作品は愛読され、蘇軾と並んで尊崇を受けた。当時の五山禅林では山谷詩講義の風気が盛んになり、博識な学僧たちは、南宋の任淵注に依拠しながら、さらに詳細かつ精密な注釈書（「抄物」）を編纂した。これらを「山谷抄」と総称する。

中でも万里集九（1428-?、号は漆桶子、梅庵）所編の『帳中香』二十卷、叙一卷は最も重要な成果の一つであると言ってよい。大部分が漢文を用いて執筆されたこの書は、巻帙浩繁にして博引旁証、多数の五山僧の旧説を集成するのみならず、詩中の人物・地理・典故などを説明するために、経史子集にわたるさまざまな漢籍や仏典を参照する。万里集九は、そうした膨大な学術情報の基礎の上に、山谷詩に対する独自の見解を提出し、時として任淵注を否定することさえあった。

従来、抄物は室町時代の口語研究の資料として利用されることが多かったが、注釈の内容そのものの価値については必ずしも十分な検討がなされていない。実のところ、黄庭堅をはじめとする中国古典詩の解釈においても、抄物は新たな視点を提供し得るものなのである。本発表では、『帳中香』の注釈の体例や講述・評論に対する考察を通して、その詩学文献としての特色を明らかにする。具体的には、(1) 先輩の禅僧との師承関係、(2) 作品の構造分析とその方法、(3) 禅宗思惟による詩歌理解、(4) 日本に関する話題の提供などについて考察を加え、五山禅林において山谷詩がどのように解読されていたのか、その一斑を窺いたい。